

## 海神〈わたのかみ〉と龍王

土田龍太郎

筑紫に天降りたまひし邇邇藝命の妃となりませる此花之佐久夜毘賣の八尋殿の燃ゆる火のさ中にありて産みたてまつりし御子のうち火照命と火遠理命の二柱は海佐知彦と山佐知彦てふ御名もて世に知られたり。山幸彦の御兄このかみと諍いさかひてつひに海原の内に入りたまひ、わたのかみ海神の女なる豊玉毘賣を娶りて三年まで魚鱗いさこの宮に暮して後、海幸彦を懲こらしたまひしことのなりゆき、古事記日本紀に詳かにて、今の世の童だに知らぬものまれなるめれば、ここにさらにまねばでもありなむかし。

そも魚鱗いさこの宮の主なる綿津見神の素姓を尋ねむとせば、伊邪那伎大神の黄泉國を出でてほどなく日向の橘の小門の阿波岐原にて行ひたまひし禊祓にまで遡らではあるべからず。この禊祓にてげにあまたの神々成り出でたまへど、三柱の綿津見神かの三柱の墨江神ともども生れたまひけること、また綿津見神の阿曇連の祖神なること古事記につばらに説きたり。

豊玉姫すでに妊うみたまひて、海うべにて鵜草葺不合命うがやふきあへずのみことを産みまゐらせしとき、凡すべて他國あたしくにの人は産む時に臨なれれば本つ國の形をもちて産むなり。故妾かれわれ今本の身をもちて産まむとす。願われはくは妾をな見たまひそ。

とあらかじめ警めたまひけれど山幸彦いぶかしさにえたへで警めに従はず。すずろに産屋を垣間見たまひければ、豊玉姫八尋和爾に化なりて匍匐はらばひ委蛇もこよひてありけり。

伊邪那伎大神の禊祓したまひしをりに生あれましし綿津見神三柱に初より和爾やからの族えにしと縁ありたりやいなや、いぶかしきかたなきにしもあらず。同じ神に關れる異なる傳へのありて、ともに今見るごとく古事記の内に併せ載りたるにてもやあるべし。

豊玉姫恥しさにたへず海に還りたまひしかば、かはりて弟妹玉依姫おととも、葺不合命を養ひ後には妃となりて侍かしづきまゐらせたまへり。

かかる傳へにもはらよらむとせば、後に神武天皇と號よびまゐらす神倭伊波禮毘古命の御母玉依姫、御祖母おほば豊玉姫さらに御曾祖父おほおぢなる綿津見神、いづれもまことの形は和爾にてありけりと思はではかなはざらまし。

そもここに和爾と云へるは鮫なりやはた鰐なりや、これまた定かならず。鈴屋大人は古事記傳の内にて

麻果切韻云鰐似鰐有足喙長三尺甚利齒虎及大鹿渡水鰐擊之皆中斷和名和仁

と倭名抄に云へるを引きたれば、和爾すなはち鰐にて魚にはあらずと思へるがごとし。

鰐と鮫といづれも鋭するどなる齒をそなへその性いとも荒れすさみてかたみに似よれるところ

少からず。あるいはわが國の古へ人鰐と鮫と同じものの女と男なりと思ひなせりしにてもやありけむ。かく云ふはわがわたくしのあとなき推し測りにすぎねば、ここにさらに論はでもあるべし。また神皇正統記の内に、山幸彦の産屋を覗見たまひしとき豊玉姫のすでに龍の形をそなへたりしおもむきを記せれど、北畠准后そもいかなる典によりてかく説けるやらむは知るによしなし。

わが皇孫すめみまのいとも尊き御血筋に、そのまさしき姿はなににてもあれ、和爾なる異類の初よりわがちがたく關れることげに思ひのほかにて、くすしといひあやしといふもおろかなり。

豊玉姫の御子を産みまゐらせしよりやがて還りたまひし海神わたのかみの宮、佛書に説ける龍宮とさも似たることげに鈴屋大人の記せるごとし。佛書ほとけがみの龍王とてもさまざまなれども、わけてわが國人のなじみきたれるは、釋迦牟尼世尊の法華經を説きたまひしとき來會し聽聞せるなる沙伽羅龍王さがらなど八大龍王にて、同經提婆達多品に語る龍女の變成男子と成佛のこと弘く知られたれど、この龍女とはすなはち沙伽羅龍王の娘にてぞある。梵語に那伽といへるが佛書の龍なれど、那伽とは今にいはゆるコブラにて蛇くちなはの族やからなれば、漢文に見ゆる龍とは姿形またく等しきにもあらず。沙伽羅とはまた海洋をさす梵語にて、沙伽羅龍王すなはち海龍王なれば、わが綿津見神のごとくつねに海中わたなかの龍宮に住ひせるにまぎれなし。平家物語灌頂卷にて龍女成佛に言ひ及べるは建禮門院を沙伽羅龍王むすめの女に擬へまゐらせるなり。

釋氏の教法わが朝に渡り來り貴賤上下おしなべてこれに歸敬せるにしたがひて、海神と龍王と別ちがたくなりゆきて、ややもせば同體に見なされまじきにもあらずなりぬるは、この海神と龍王とかたみに類へやすきところの多きを思へば、げにさがたきわざにこそ。

人皇初代神武帝の御祖母なる豊玉命の八尋鰐なりけむはすでに云へるごとくなれど、このほかに皇孫すめみまの御筋の龍蛇やからの屬と淺えにしからぬ縁のありけむこと、中比に出で來し典どものこかしこに見ゆるは、まことしとこそは思はれね、心ひかるるかたはたなきにあらず。

平家一門の壇の浦に亡びしとき、二位の尼の安德天皇を懷いだきまゐらせて海に沈みし後、神璽と内侍所はことゆゑなく都に遷らせたまひしかども、寶劍ばかりは再び現れず失せはてぬること弘く知られたれど、これにつきて天台座主慈圓、愚管抄の内にて左のごとくに説きたり。

海ニシツマセ給ヒヌルコトハ、コノ王キミヲ平相國イノリ出シマイラスル事ハ、安藝イツクシマ明神ノ利生ナリ、コノイツクシマト云フハ龍王ノムスメト申シツタヘタリ、コノ御神ノ、心ザシフカキニコタヘテ、我身キミコノ王ト成テムマレタルナリ、サテハテニハ海ニカヘリヌル也

トゾ、コノ子細シリタル人ハ申ケル、コノコト誠ナラムトオボユ

コノ王トハ安德天皇にほかならで、この帝まことは龍王の女にて、平清盛の歸依せる嚴嶋明神なりけりてふ一説を引き示せり、さらにまた、我は沙伽羅龍王の女子によしなりてふ嚴嶋明神の託宣、醍醐寺新要錄に載りたりとも云へり。

平家物語には異本くさぐさあれど、わが日頃なじめる刊本を披き見るに、卷一に劍といへる章段ありて、寶劍沈みしままにつひに失せぬるゆゑよしを述べしるに、安德天皇まことは八股大蛇の化身なりてふいかにもあやしきこととく左のごとき勘文をも載せたり。

——ある博士の考へ申けるは、昔出雲國ひの川上にて、素戔嗚尊にきりころされたてまつりし大蛇、靈劍をおしむ心ざしふかくして、八のかしら八の尾を表事として、人王八十代の後、八歳の帝となりて靈劍をとりかへして、海底に沈み給ふにこそと申す。千いろの海の底、神龍のたからとなりしかば、ふたたび人間にかへらざるもことはりところとおぼゆれ。

ここに示せるごとく、もし八股大蛇やがて神龍なりとせば、この大蛇と沙伽羅龍王とまたく同じきやいなやこそはえ定むまじけれ、たえて縁なしとしも思ひがたからまし。

崇神天皇六年、殿を同じくしたまふを安からずおぼしめして、草薙劍をも大和國笠縫邑に移しまゐらせ、あらたに御身の護りとして、齋部氏ひきろを率て天目一箇神あめのまひとつのかみをして寫しの劍を造らしめたまひしこと、古語拾遺に記せり。しかれば西海に沈みはてぬるは正體の草薙劍にてはあらず、後に鍛へまゐらせし寫しにすぎねば、まことの寶劍が失せしにはあらず。今の熱田に齋いはひまゐらす劍こそ正體の草薙劍なるにまぎれなけれ。このこと平家物語の劍の章段にもつばらに説きたれば、八股大蛇が安德天皇に生れかはりて正體の劍をとりかへしたるおもむきを述ぶる右の勘文とは本末うちあはぬがごとくなりていぶかしきことこよなし。寶劍の正體にはあらぬことを知りつつ八股大蛇のなほそをわがものにせむとたばかることのありうべしとはをさをさ思ふまじければなり。

そははたいかにてもあれ、かかるあやしき傳への出できぬるは、熱田のことはふつと忘れて、西海に沈みぬるは正體の寶劍にことならずと思ひしみたるともがらの世に少からざりしがゆゑなるべし。慈鎮和尚すらなほかく思ひ誤りけむこと、愚管抄の書きざまによりてぞ推して知るべき。

かの北畠准后、かかるあとなしごとを訂さむとて、神皇正統記の内にて草薙劍につきて敘ぶることいとも詳しくことわりたちたれば左に引きみではあるべからず。

寶劍も正體は天の叢雲の劍——後には草薙劍と云——と申すは熱田神宮にいはひ奉る。西海に沈みしは崇神の御代におなじくつくりかへられし劍なり。うせぬることは末世のしるしにやとうらめしけれど、熱田の神あらたなる御こと也云々 なべて物知らぬたぐひは、上

古の神鏡は天徳長久の災にあひ草薙の寶劍は海に沈みにけりと申し傳ふること侍にや。  
返々ひがごとなり。此國は三種の正體もちて眼目とし福田とするなれば、日月の天をめぐら  
ん程は一もかけ給まじきなり云々

かけまくもかしこき日女大神の御裔、天日嗣を世々に傳へたまひて、御裳濯川の流れ絶え  
せず天地とともに窺りなければ、仰ぐにいや尊くなりまさるはさることなれども、この天日  
嗣の御筋に海神龍王の族とゆかり浅からぬことこのらの典に説きたれど、右にはただかた  
そばばかり引きたるのみ。かかる傳へいともよしありげにてあやしきことよなくて、あさ  
ましきけさへそひたるはいかさまやうこそあらめ、まことはいかがなりけむ、せちに知らま  
ほしけれど、これらなべてわが拙き智慧のえ及ぶさかひにあらねば、今はさながらさしおか  
むほかすべなきぞあいなき。

およそ龍蛇龜鰐のたぐひ、今の世にはおしなべて爬蟲類などといふを習ひとすれど、畏き  
わが皇孫の御筋と、ものにもこそよれ、かかる爬蟲類と近きものに思ひなせしともがらのわ  
が國の上つ世と中比にこころありたりしことばかりは疑ふまじきにこそ。

爬蟲類なりとてあながちに忌むべからず。かかる異類との關り、かへりてわが皇御國の玄  
く幽く祕かなる奥處を窺はしむるつまとならざらむもはかりがたければ、ゆめなほざりに  
思ふべからず。これらのことども、まことなりやそらごとなりや、やがて定むべきすべとて  
はなけれど、かにかくにいみじくおもしろしいはでやはあるべき。

(令和七年六月二十六日受附)